



あいらびる人

あいらびる人の傍き あいらびる



昔々、ある村で機織りをして服を縫っている少女がいました。

少女は貧しい生活をしていましたが、作った服を村の人たちに渡すことで、好かれていました。

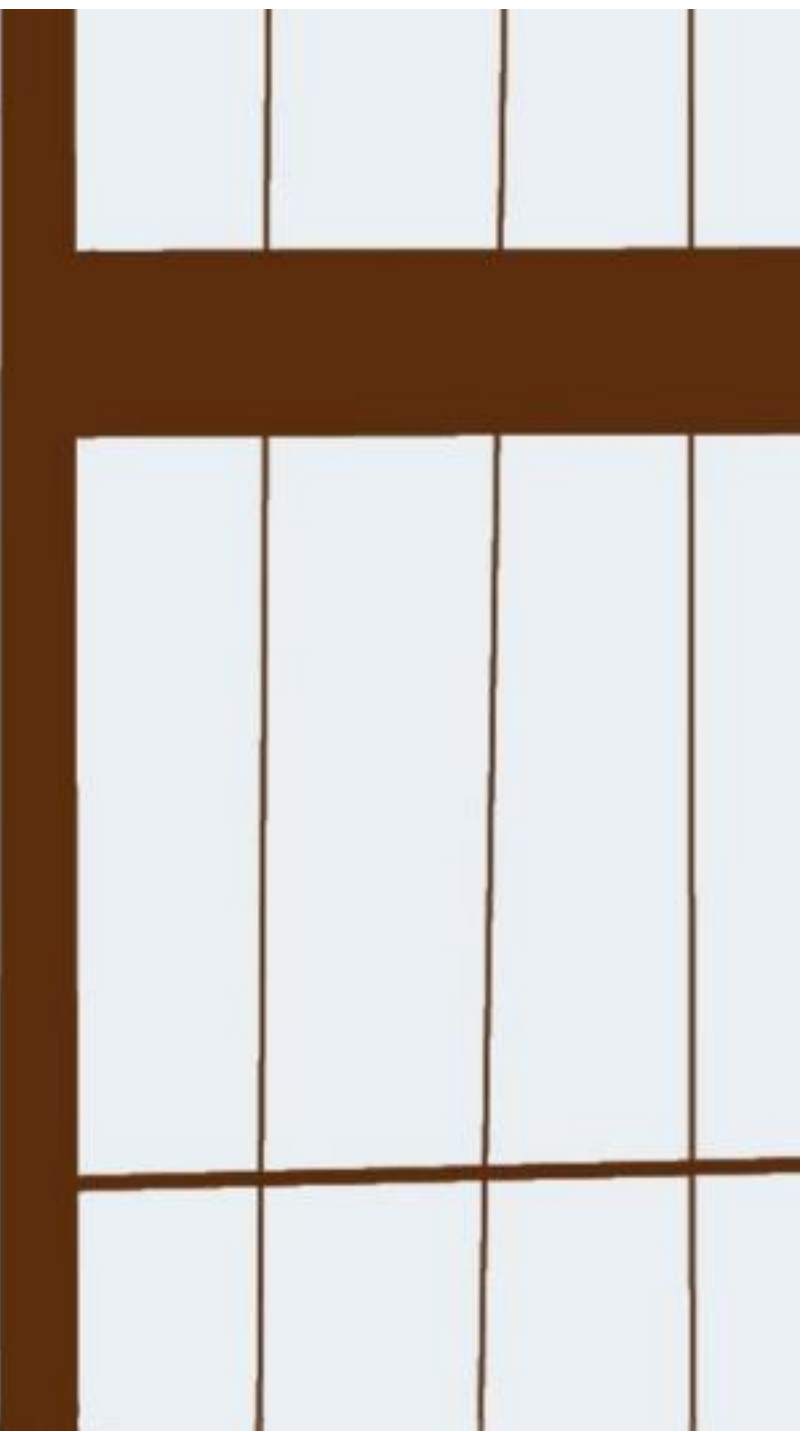


ある日、いつも通り機織りを使っていると、誰かが少女の家を訪ねてきました。



戸を開けるとそこには、上等な服を着た男がいました。

「突然すみません、この村でしばらくの間泊めてもらえる民家がありますか？」



自分が着ているボロの服とは段違いの物に見とれていた少女は、男の質問に少し遅れて答えた。

「いえ、ここは小さな村なので宿泊できるような民家はありません。ですが、貴方さえよければ、私の部屋に泊まっていきませんか？」



「でも貴女の休む場所がなくなるのでは？」

「私は、作業部屋があるのでかまいませんよ」

「では、お言葉に甘えて、しばらくの間お世話になります」

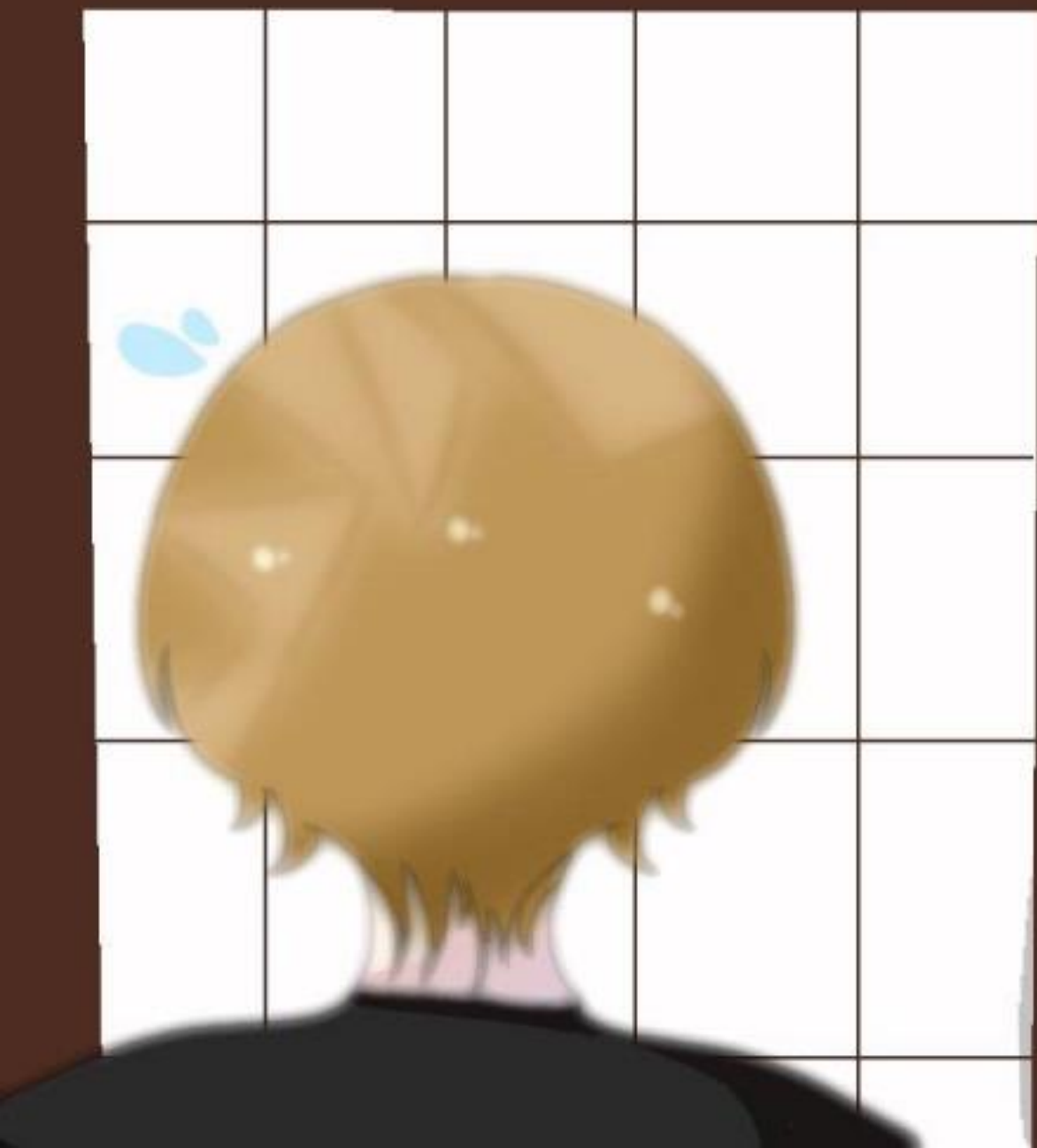
そして、少女が男を部屋に案内し、数日が経ちました。



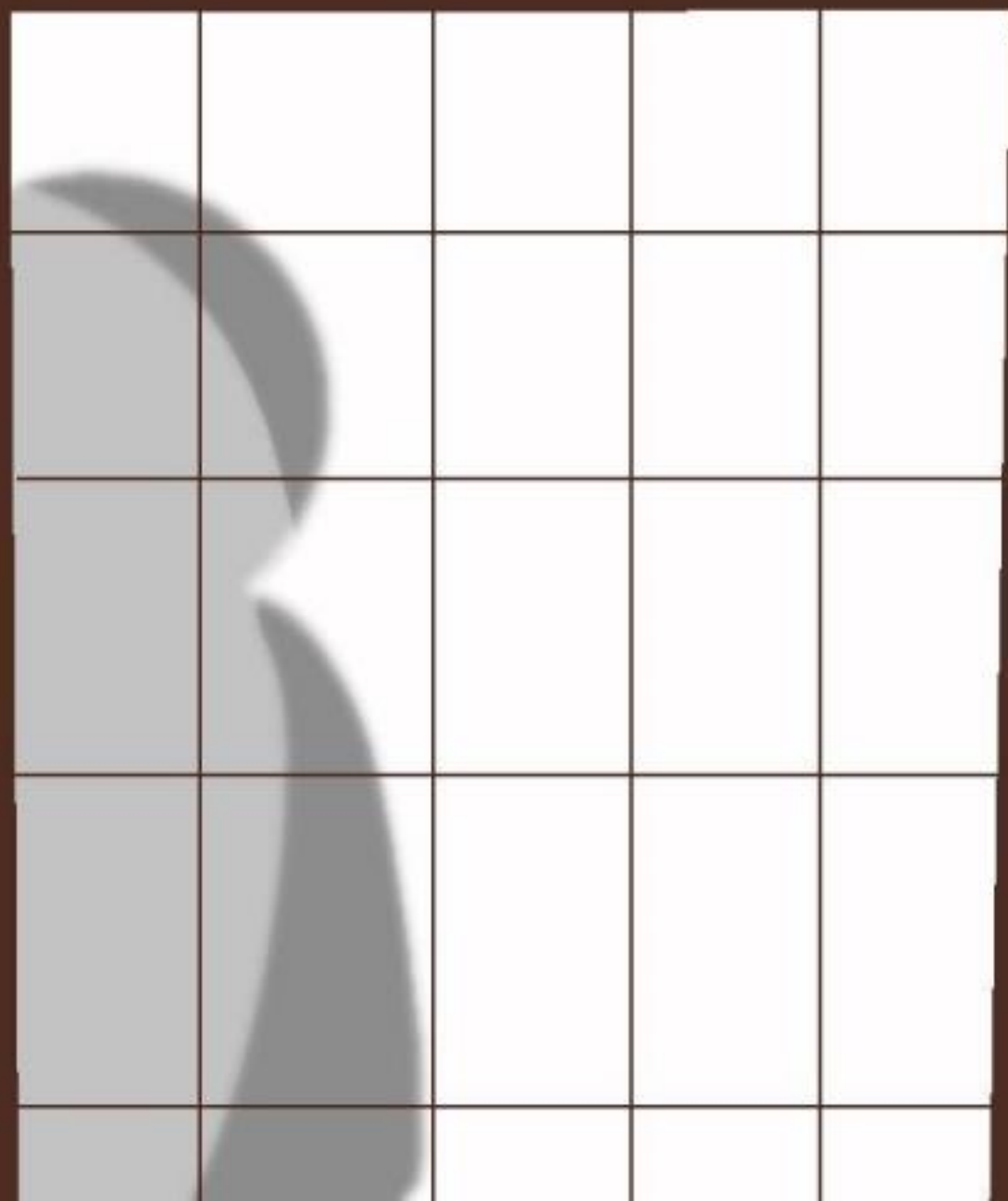
少女は男が家に来てから数回ほどしか作業部屋から出てきていませんでした。

作業部屋は三畳ほどしかなく、身体を休めるスペースがなさそうでした。

男は自分が部屋を借りてしまったせいで少女に気を使わせて体調を崩しているのではと心配になり慌てて戸を開けてみることにしました。



||



「あら、どうしました？」

少女は驚いたものの、元気な状態で楽しそうに機織りをしていました。

「い、いえ。あまり部屋から出てきていなかったのもので、中で倒れているのではと思って」

「私、機織り機を使っている間は楽しくて体調崩すことがないんです」



ホッとしている男の前に一枚の服が置かれました。

「貴方の着ている物と比べたらお粗末ですが、良ければ」

「僕の為にわざわざ！？ ありがとうございます！ この服系が凄く綺麗ですね」

「この五種類の系にはそれぞれ願いが込められていて、とても特殊な物なんです。だから着物が丈夫なんです」



すると話している途中でお腹の鳴る音が響いた。

「ご、ごめんなさい」

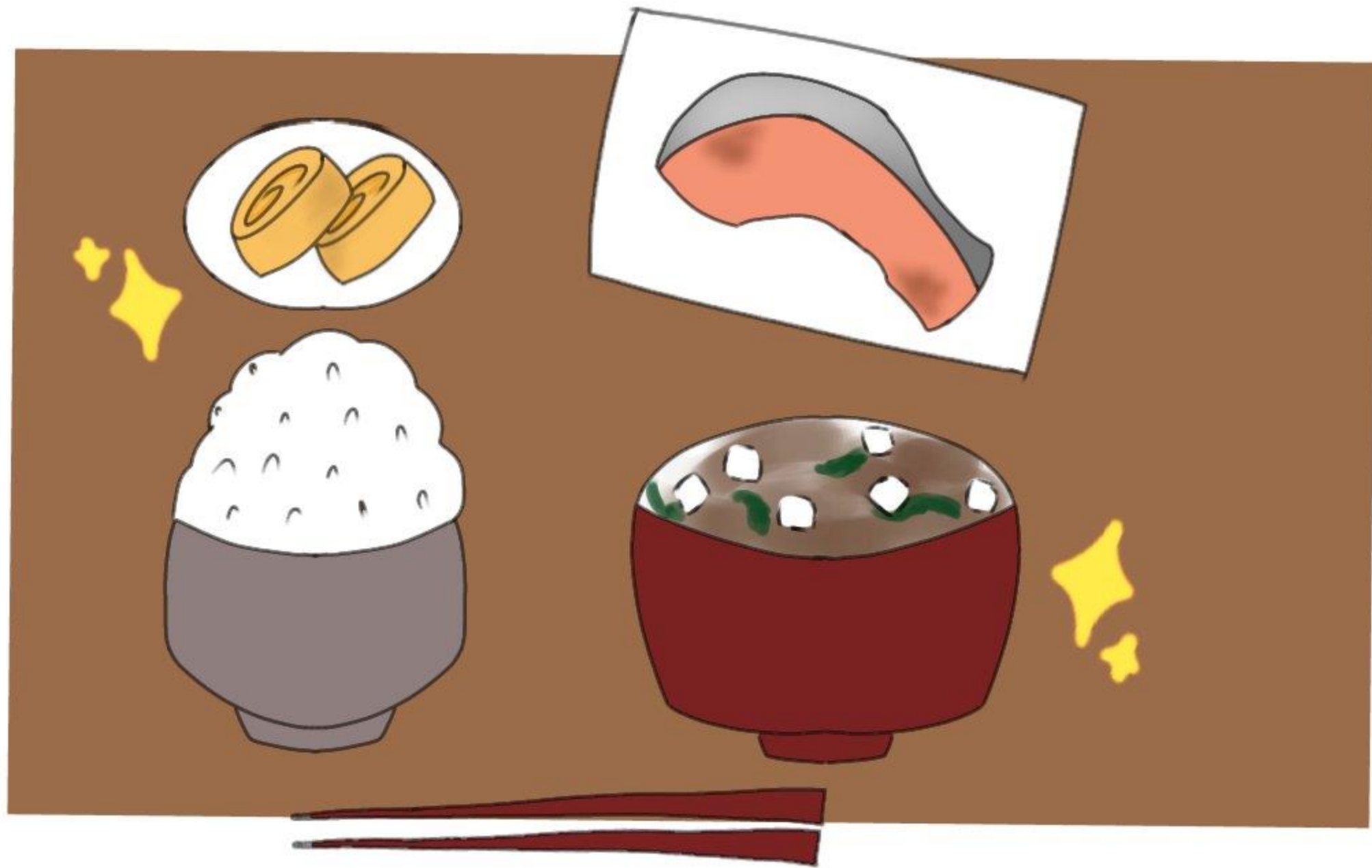
「部屋と着物のお礼と言っは何ですが、お礼に僕が食事を作りますね」



クスツと笑いながら、そう言った男は家を出たかと思えば、沢山の食材を買ってきて、料理を作り机に並べた。

「美味しそう！　こんなによろしいのですか？」

「勿論！　僕、貴女とちゃんと会話してみたかったので食事しながらお話ししましょう」



少女は男がこの村に来た理由が気になっていたので聞くことにした。
彼は良いところの息子で跡継ぎの為に親に勝手に縁談を取り付けられていてそれが嫌で逃げ出したと、語った。

「情けないですが、ずっと親の言いなりになるのが嫌で逃げ出してここまで来たんです」

「貴方は情けなくありません。私にこんな美味しくて幸せな食事作ってくれたのですから」




少女は暗くなった男の手を握り、優しく
声をかけた

「ありがとうございます。そう言われると
嬉しいです」

無意識に手を重ねてあっていた二人はそ
れに気づくと顔が赤くなったが、嫌な気持
ちにはならなかった。

その後も食事をしながら話をし、一気に打
ち解けるようになりました。





次第に恋人の関係になった二人に初めは喜んで
いた村の人達でしたが、恋にうつつを
抜かして、服を全く作らなくなった少女に
段々と不満が湧いてきていました。

ある日二人で散歩をして家に帰ってくると
家の中は滅茶苦茶になっていました。
「酷い……。誰がこんな事を」



「あら、遅かったわね」

玄関前から聞こえる声に顔を上げるとそこには一人の女性がいた。

「母上！？ 貴女がこれを！？ 彼女の大切な物になんてことを」


「貴方が逃げ出してこの女と色恋しているから痛い目を見せてあげたのよ。これに懲りたらさっさと女から離れて戻ってきなさい」



「彼女は何もしていない！ 僕は貴女の操り人形じゃありません。僕は彼女と一緒に生きていくと決めたのです」

女は怒りをあらわにしながら、帰っていった。





家の中を片付けようよと少女に声を掛けようとする
と彼女の体は薄くなっているようだった。


「どうした！ 何でいきなり身体が透けて……」

「ごめんなさい。ずっと言ってなかったけど私、人間じゃないの」

少女の本当の正体は空の者だった。機屋で縫った着物を地上の人に渡し農作を祈るという役割で地上に降りていたのです。

「機屋が壊されるのは私の命が尽きるも同じことなの」





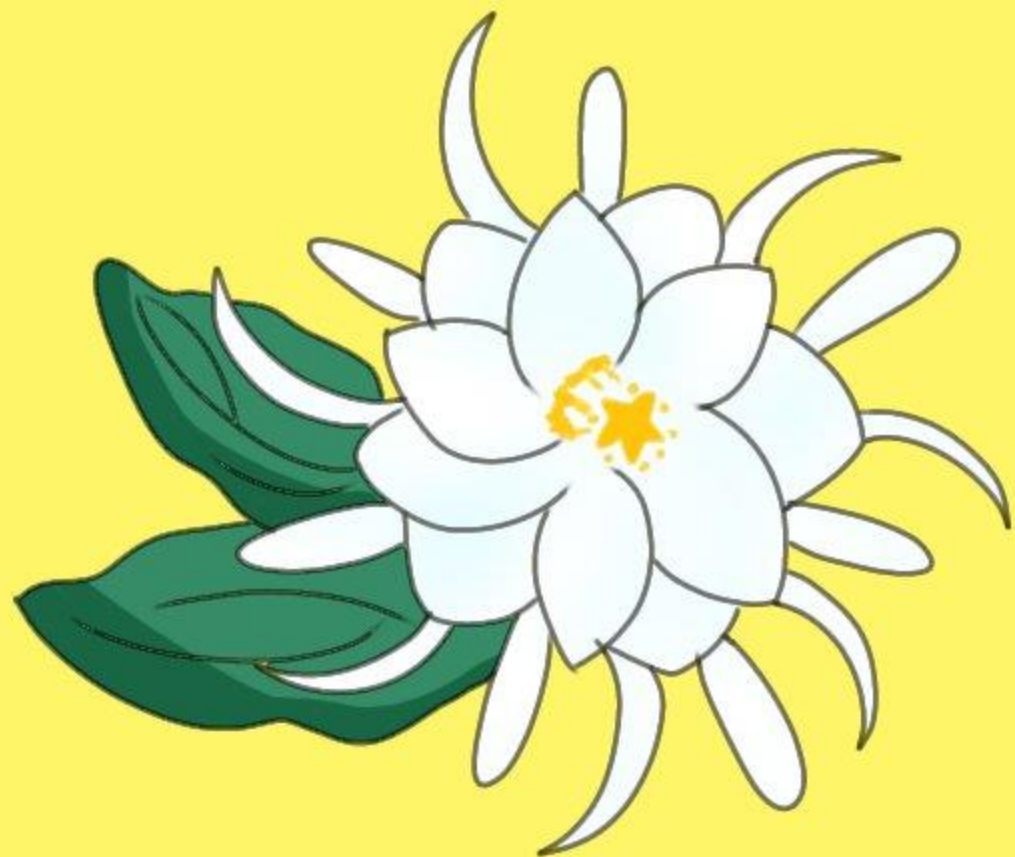
「そんな……　じゃあ君にはもう二度と会
えなくなるのか……？」

そして・・・

少女は男に抱きしめられながらそのまま
消えていった。

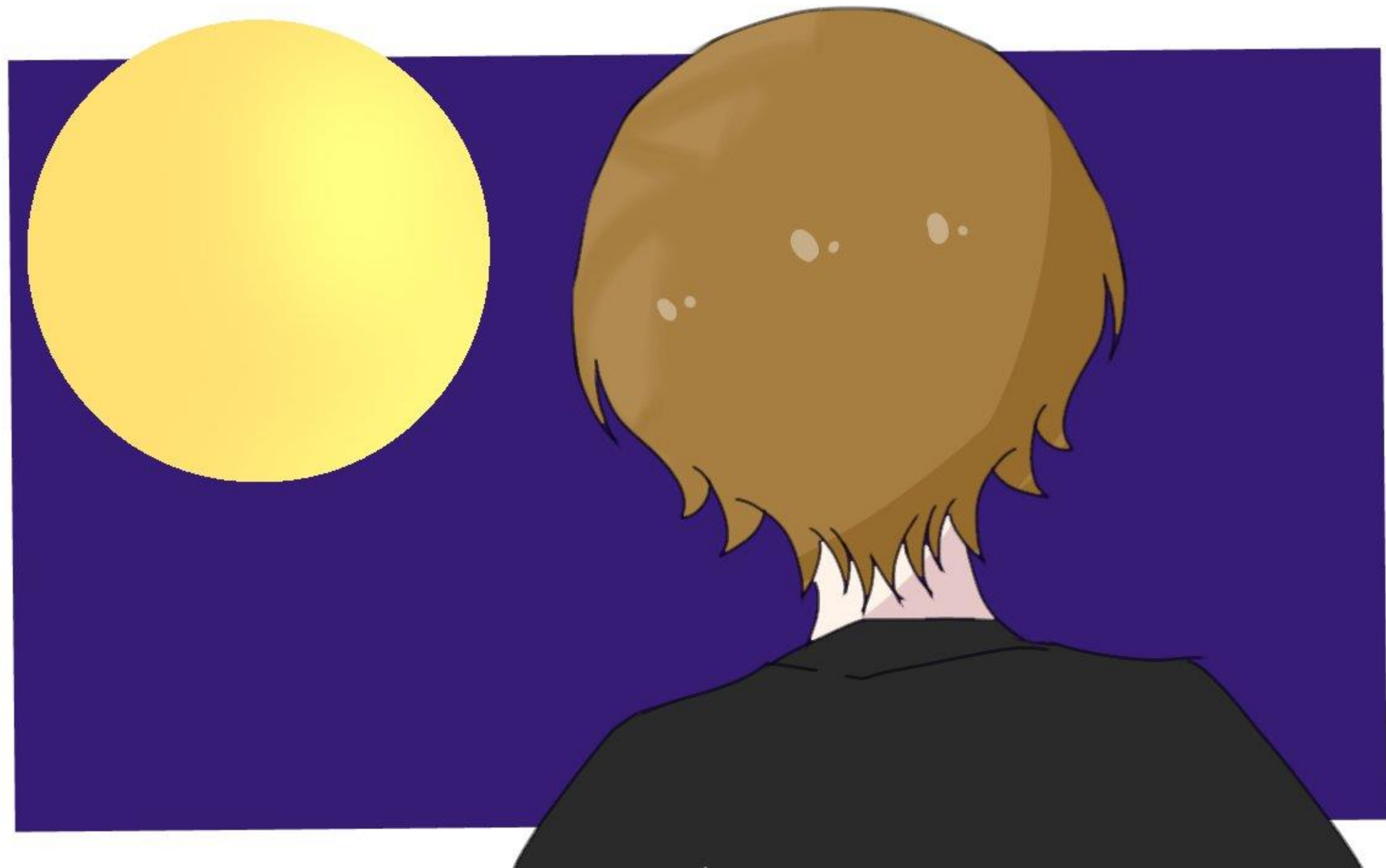


彼女が消えたことに呆然としているとさっきまで彼女がいた場所に月下美人を模したブローチが落ちていた。
男は涙を流しながらもそのブローチを握りしめ、大切にすることを誓った。



それから一年。

「今日で一年か。過ごした期間は短かったけど本当に楽しい日々だったな」
満月を見ながら一年前を思い出している
と・・・




「ずっと私の事を想ってくれていて、ありがとう。また、貴方に会えて嬉しい」
「もう二度と会えないと思ったよ。夢みたいだ」



男は少女に触れようとしたが、少女の体は透けていて触れることは出来なかった。





「少しの間しかいれないけど、私達の想いが繋がっていたら一年に一度は必ず会えるわ。だから、またその時まで」

少女はそう言って手を振りながら再び光になって消えていった。

「ああ、また一年後に」





こうして、二人は一年に一度会えるように
とブローチに願いを込めながら、七月七日
を楽しみにしていくのでした。

～【完】～

